

## 道下の農業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23885">http://hdl.handle.net/2297/23885</a>

## 2. 道下の農業

野 澤 豊 一

1. はじめに
2. 道下の生業
3. 道下の農業の変遷
4. 新旧の農業形態
5. おわりに

### 1. はじめに

現在の日本における農業の話題は、けっして明るいものではない。いうまでもなく最大の問題は、国内農業の衰退とそれに伴う食料自給率の低下である。最近では、一昨年から昨年（2007～2008年）にかけての、バイオエタノールの開発、オーストラリアの早魃、そして投機マネーの介入等による輸入穀物価格の高騰が日本を騒がせたが、これにより日本の危うい食糧事情を改めて実感した向きも多かったのではなかろうか。一つひとつの農村に視点を移すと、この問題は農業の後継者不足や耕作放棄の拡大等として浮かび上がってくる。農作物の自由市場化が進みつつある現在、農業の基盤を整えることは急務の課題であろう（これには当然、食の安全の確保という意味合いもある）。

一般にそうした状況のなかで急がれるのは農業の大規模化とされる一方で、能登地方の場合その（特にコメ生産の）農業経営規模は全般的に零細といわれている。この事情は道下地区でも変わらないが、では実際に道下の人びとはこの現実に向かい合っているだろうか。この章では日本の農業問題をあつかうわけではないが、上の問題意識を念頭におきつつ、道下地区の農業について記述する。

## 2. 道下の生業

道下は、周囲を小高い山で囲まれ、中央に平地と川（八ヶ川）が位置している。一見したところでは能登地方によくある農村の風景だが、いくぶんユニークなのが、農地と宅地の配置である。すなわち、普通ならば山際に家屋が立ち並び平地に田んぼが広がるのを期待するところだが、道下では平地の真ん中にメイン通りがあり、その両脇に住宅が立ち並んでいる<sup>1)</sup>。平地がこの様ないわゆる町家風である一方で、田畑はといえば、山の斜面にまで広がっている（現在では山手の田畑は耕作放棄される傾向があるため、過去にはもっと斜面の田畑が多かった）。

この理由のひとつは、隣の黒島地区が廻船業で栄えた頃、道下は宿場町として発展したことにあられる。このため、道下では比較的近年まで、荷馬が多く飼われており、馬市で働く「馬方」と呼ばれる人も多かったのだという。

道下は広大な農地を有する集落ではないが（次節に後述）、農業と共に生業として道下を支えてきたのは、職人業であった。道下は「職人の町」と呼ばれるほどに職人（特に大工、左官職人、屋根葺き職人など）の多い地域なのである。現在70～80歳代の（元）職人の方がたにお話を伺うと、彼らの父親も職人をしてきた場合が多かった。つまり、これらの職人さんたちの青年期には、「長男であれば父親と同じ職人になる」というのが、十分にあり得る選択肢だったようである。そして彼らの多くが農業と職人業とを兼業してきた。

ところで、職人の道という選択肢は、時代が下がるにつれて小さなものとなっていった。現在60歳代前半（終戦直後生まれ）の人々になると、「月給とり」、すなわち会社や役所に勤めて安定した現金収入を得る仕事を志向するケースが多くなるのである（特に多いのが学校教員で、旧門前一带には教員が多いという）。このため、今回の実習調査でお話をうかがった道下の（元）職人さんは、ほぼ全員が70歳代より年上の方がたであった。また、地元の職人の仕事自体も減りつつあるようだ。平成19（2007）年3月の震災後には道下やその周辺集落で多くの住宅が建て替えられたが、その工事は基本的に震災復旧工事を専門とする工事業者が請け負っており、地元の大工はせいぜい2～3軒の建て替えにしか関わらなかったという。「地元の職人」の時代も終わろうとしているのかもしれない。

道下の生業として特筆すべきいまひとつは、林業である。林業で生活が成り立つほどの「山もち」がいたという話は聞かなかったが（それでも山を多く持つ世帯は力のあるところであった）、住宅を建てる際には、自分の山から木を切り出して木材として使用するというのが一般的であった。20年ほど前までは、「あと何年で柱になる」と建築材になることを見こして、スギやアテの枝おろしを一年に一度はしていたところが少なくない。しかし、安価な外材が輸入されるようになって久しい現在では、荒れている山が大半という。

### 3. 道下の農業の変遷

本節では、農業センサスで得られるデータから、戦後から現在にかけての道下の農業の変遷について述べる。

表 1：専兼業別農家数（農業センサスより）

	総戸数	総農家数			
		専業農家	一種兼業	二種兼業	
1960年	265	214	27	60	127
1970年	280	199	12	47	140
1975年		178	12	32	134
1980年	315	173	12	10	151
1985年		164	17	8	139
1990年	291	138	20	2	116
(販売農家 <sup>2)</sup> )		(90)	(9)	(2)	(79)
1995年		126	19	2	105
(販売農家)		(81)	(9)	(2)	(70)
2000年	286	105			
(販売農家)		(61)	(6)	(1)	(54)
2005年販売農家		44	17	2	25

表 2：経営耕地面積（農業センサスより）

	面積計 (単位：a)	田	畑	工芸作物(茶実面積を含む)	果樹地
1975年	9007	5992	3015	1252	—
1980年	7709	5560	2144	1224	5
1985年	6921	5438	1478	632	5
1990年	6314	5109	1192		13
(販売農家)	(5325)	(4308)	(1004)	149	(13)
1995年	5975	4889	1057		28
(販売農家)	(5003)	(4140)	(841)	120	(22)
2000年	4445	3633	762		50
(販売農家)	(3556)	(2906)	(637)	—	(13)
2005年販売農家	2883	2517	356	—	10

前節でもふれたように、道下は農業のみで生計を立ててきた集落ではない。1970（昭和45）年における経営耕地面積は9730aだが、これを当時の総農家数199軒で割ると、農家一軒あたりの耕地面積は49aとなる（表1+2を参照）。この一世帯あたりの農地面積は、米作を主な生業とする農村としては少ないといえよう。表1からは、1960（昭和35）年という比較的早い時期から二種兼業農家が専業と一種兼業を加えた数を上回っていることが分かるが、この事実も農地の狭さを反映している。先述した、「農家と職人業との兼業傾向」や「月給とり志向」がみられたのも、同様の理由からと思われる。

1970年代から1980年代にかけては、畑の面積が全経営耕地の3分の1を占めているが（表2）、この大半はタバコ畑であろうと思われる（山の斜面に主に広がっていたという当時のタバコ畑には、現在ではスギが植林してある）。道下のタバコ栽培は、昭和30年代にピークを迎えた。現在ではほとんど農業を行っていない世帯でも、昔の作業を「大変だったものだ」と回顧する声が聞かれたが、最盛期には道下全体の三分の一以上の世帯がタバコ栽培に従事していた。タバコの加工には乾燥用小屋の設置に投資しなければならないが、複数の世帯を聞き取りしてみたところでは、ほとんどの世帯が乾燥小屋を所有していたようである。

それほどまでにタバコ栽培していたのは、それが大変に良い収入源であったために他ならない。1反（10a）あたり、現在の金額に換算して30～40万円もの現金収入が見込めたというから、大変なものである。道下住民のJAへの貯金額も膨大であったため、過去には道下はJA合併に最後まで抵抗したほどであったという。（最終的には、タバコ栽培の衰退と担い手の高齢化がかなり進んだ1995（平成7）年4月に、輪島市、旧門前町、穴水町、旧登都町、旧柳田村の1市3町1村が大同合併して「JA おおぞら」となっている。）

2000（平成12）年の経営耕地面積は、生産調整（減反）が本格的に始まった1970（昭和45）年に比べて半減しているが（表2）、特に山際の田んぼに耕作放棄が進んでいるという。また同期間には、農家人口も3分の1近くにまで落ち込んで、高齢化も深刻である（表3）。2005（平成17）年の時点で1ha以上の農地を耕作している農家は6軒である（表4）。請負農家も5軒ほどあるというが、そのほとんどは70歳代以上であるという（例外が次節に後述するBさんである）。

表3：農家人口（農業センサスより）

	総計	15～29歳 <sup>3)</sup>	30～59歳	60～64歳	65歳以上
1970年	836	140	336	175	
1975年	695	124	302	44	115
1980年	648	88	289	57	120
1985年	595	64	268	42	134
1990年	492	27	199	55	125
(販売農家)	(339)	(18)	(143)	(40)	(75)
1995年	440	42	285	54	138
(販売農家)	(293)	(28)	(108)	(39)	(85)
2000年	326	28	101	38	135
(販売農家)	(210)	(21)	(70)	(23)	(80)
2005年販売農家	130	14	35	9	67

表4：経営耕地面積別農家数（農業センサスより）

	自給的 農家 <sup>4)</sup>	0.3ha 未満	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～2.0	2.0～3.0	3.0～5.0	5.0～ 10.0	10.0 以上
1970年		63	61	58	17	—	—		
1975年		55	52	56	15	—	—		
1980年		67	53	40	13	—	—		
1985年		66	53	33	12	—	—	—	
1990年	48								
(販売農家)		※	48	35	6	1	—	—	
1995年	45								
(販売農家)		※	39	34	5	3	—	—	
2000年	44								
(販売農家)		※	32	23	4	—	1	—	
2005年 販売農家		—	25	13	4	1	1	—	—

#### 4. 新旧の農業

本節では、前節まで概観した戦後の道下の農業の変遷を、もう少し具体的に掘り下げてみたい。新旧の農業の実情を浮かび上がらせるために、ここでは二人の方の聞き取りをやや詳しく記述する。一人は、農業と職人業を兼業してこられたAさんである。戦後間もなくに青年期を迎え

た A さんの農業との関わりの歴史は、職人を多く抱えてきた道下（ひいては門前）のひとつの典型といえるかもしれない。もうひとつは、A 氏（70 歳代、男性）よりもひと世代若く、道下で唯一農業の大規模経営を行っている B さんである。

#### 4.1 農業と職人を兼業してきた A さん（70 歳代、男性）

A さん（聞き取り当時 76 歳）は、昭和 7（1932）年に道下の山手で、いわゆる開拓農民の家の子どもとして生まれた。A さんの祖父が開墾した農地は 2 反ほどだったが、不況下で生活は苦しく<sup>5)</sup>、A さんが生まれて間もなく、一家は大阪に移り住んだ（土地の少ない農家には似たような境遇の人も多く、なかには満州事変以降に満州に移住した者もあったという）。太平洋戦争時に父親が招集されたことがきっかけで、一家は道下に戻り、母親のキョウダイ一家と共同生活をした。A さんは当時を振り返って、「（親同士が）同じキョウダイといっても、食べるものが厳しくなってくると、イヤな思いもしたものだ」と語る。

終戦後に食糧が不足した時期には、「自分で食べるものを作らなきゃ」と、大阪へ移住する以前の山手の田んぼで米を作り始めた。戦前は体ひとつでしていた農業だったが、今度は父親がはたいた貯金で、栗毛の農耕馬を買った（当時の道下は馬市があることで知られていた）。馬は農耕のためだけでなく、道具を運ぶこともできれば、糞を堆肥に利用することもできる（ただし、飼い始めの 1~2 年間は仕事ができなかったため、「大人になって骨がしっかりするまでは、ただ養うだけ」だったという）。A さんは、朝晩この馬を引いて田んぼまで連れて行ったものだという。A さんは、馬に関してはとりわけ楽しそうに——馬が言うことを聞かずに、A さんや共同作業者（馬は基本的に二人で使う）を田んぼに押し倒してしまったなどを——話された。

昭和 34（1959）年（27 歳）に、（おそらく現金を必要としていた）同じ道下の人から、田んぼを 2 反歩購入した。これにより、「一年喰うのに十分足りるだけ」の米が獲れるようになった。この、A さんにとって初の平地の田んぼは、耕地整理をする以前は 6~7 枚分にもなったが、現在では比較的広い一枚とやや狭いもう一枚の、あわせて 2 枚になった。

A さんは農業ばかりを生業としていたのではない。戦争が終わってからは、特に納税のために必要だったという現金収入を得るため、農閑期を中心に富山（不二越）に日雇いの出稼ぎに出ていた。10 歳代も後半になると、今度は桶屋の見習いとして阿岸に通うようになった。しかし、無事に年季は明けたものの、道下で桶屋を開業してもなかなか需要はなかった。A さんの考えによるとこの理由は、桶というものは一度買ってしまえばそれでことが足りてしまうし、修理するといっても一度やれば半年や一年はもってしまうから、というものである。

ただし、桶屋の技術がまったく役に立たなかったわけではない。当時は終戦直後で学校などの

大きな建物が立て続けに建築されていたが、ここで桶屋見習いの時に習得した竹を割る技術が物を言った。当時は泥壁が主流だったのだが、この下地に竹を使用したため、壁塗りの仕事を任されるようになったのである。Aさんは以後、左官職人として仕事を受けるようになった。40歳代初めに、左官をしていて知り合った人に誘われて、近隣集落の本郷の縫製工場に勤め始めた。61歳で工場を定年退職してからは、再び左官と農業を兼業してきた。

しかし、定年後ほどなく喘息と心臓病を患い、一時入院する事態になった。それとちょうど同じ時期に、山手の田んぼの畔とため池に、復旧が必要なほどのトラブルが発生した。これを直すのに500万円もの費用がかかることが分り、病気をかかえた体では如何ともしがたいと、山手の田んぼを作るのはあきらめた。それ以後も平地の田んぼ作りは続けていたが、今年(2008年)の夏に作業をしていたら、呼吸困難で倒れてしまった。大事には至らなかったが、これで平地の田んぼの作業からも完全に手を引く決心をした。

Aさんは、力仕事ができない実感と米作りに直接携ることができないことを、率直に「寂しい」と言う。現在は、近くの親類の土地で、自家用に野菜を少し作っているだけである。山手の田んぼの耕作放棄(しばしばAさんのように健康の問題と関わるであろう)や、米作中心からより規模の小さい自家用畑作への転換は、道下の高齢者と農業との関わりに一般的に見出されるものといえる。

#### 4.2 大規模経営に挑戦するBさん(50歳代、男性)

道下地区の専業農家は2005(平成12)年の統計で17軒だが(表1)、そのほとんどは、家長が仕事を定年退職して主に年金で収入を得ている農家である。そうした状況のなかで、現在58歳(昭和25[1950]年生まれ)のBさんは、専業農家としては群を抜いて若い。Bさんは、諸岡地区全体のなかでも、大規模経営の農業に挑戦している、唯一の人物である。とはいえ、能登地方での農業がビジネスとして利益を生むまでにいたることは、容易ではない。Bさんは、自身の事業を支える心情を、(ビジネスであると同時に)「道下の農地を守ること」とも位置づけておられるようだ。

そのように、道下、ひいては旧諸岡地区全体の農業の行く末を案じるBさんだが、現在のような考えに至ったのは、社会人になって何年もたってからのことであった。そもそも田舎暮らしを好まなかったというBさんは、大学卒業後に金沢で自動車関連の仕事に就いていた。しかし、父親の強い要望(Bさんは長男である)により、就職してから二年後に、道下に戻って農協に勤め始めた。農協に就職してしばらくは農業機械の営業をしていたが、何年とたたないうちに任意団体である「営農組合」の事務を務めることになる。旧諸岡地区在住の7名で組織したこの組合は、



農業の大型化と機械化を進めるために、大型機械を使用できるオペレーターを育成するのが目的であった（Bさんの記憶はやや曖昧だったが、営農組合は昭和50年代の後半に発足したようだ）。

「機械が好きだった」というBさんは、ここでの事務業を通じて農業をおぼえた。営農組合はさらに、平成7（1995）年に「モロオカエーシー」という農事組合法人に改組した<sup>6</sup>。これは、法人化することで融資や補助金を得やすくし、大型農業機械を購入するためである。

Bさんはこのように、大規模農家の育成に「いつの間にか」関わってきたのであった。そしてその一方で、「一人で事務局長をして給料をもらっていても、地区の農地は荒れていくばかり」だということに、限界を感じるようになった。そこで、平成11（1999）年には農協を辞めて、専業農家になる道を選んだ。自宅の農地を中心に2～3haで始めた耕作農地は、現在までに合計で17haにまで広がっている。現在、道下の農地は42haほどというから、これは道下地区全体の半分に近い広さである。これほどの広い農地ではあるが、米作に絞った経営ということもあり、基本的にはBさん一人で作業をこなしている。ただし、春と秋、すなわち田植えと稲刈りの時期には、道下の人を日雇いしている。現在のやり方であれば、最大で25haほどまでなら経営可能なのだそうだ。

大きな耕地で、コメ一本の生産で経営を維持するために<sup>7</sup>、Bさんはいくつかの工夫をしている。次にそれらを見ておこう。

まずは、複数品種のコメの育成である。Bさんのところでは現在4品種の米を作っているが、これは主に、作業の時期を分けられるというメリットのためである（田植は5月の連休～6月10日にかけてと変わらないが、カメムシ駆除の消毒と収穫の時期が異なる）。早稲には「能登ひかり」と「ゆめみずほ」、そして中手には「コシヒカリ」と「かぐらもち」であり、早稲と中手の割合は4対6である。早稲品種はコシヒカリに比べると廉価だが、農協よりも販売価格が高い外食産業との大口の取引が見込めるという。

Bさんはまた、個人の消費者にも農協を介さずに直接販売している。Bさんはそのために、自らが名づけてパッケージのデザインもした「能登がんばる米」という自家ブランド米を考案している。自家販売する米の量は収穫全体の約6割（残りの4割は農協に売る）である。なかでも、「能登がんばる米」は、インターネットやファクスでも注文を受けられるようにしてある。ネット直販を始めた平成19（2007）年は、ちょうど能登半島地震の復興を呼びかけた複数の新聞社がBさんの活動を取り上げたため、ネット直販の割合は収穫量全体の15%ほどにものぼったという。

ただし、平成20（2008）年もBさんの「能登がんばる米」を注文する「リピーター」は、かなり少なかった。Bさんはこのことにふれて、自身のことを「商売下手やなあ」と自己分析している。稲刈り前や農閑期には、営業のために各地へ出かけるのだが、新潟県のようにブランドが定

着してない能登の米を強気に売り出すことはなかなか出来ないのだという。インターネット上の米の販売価格を見ても、どこよりも安い値段しかつけられない。また、モロオカエーシーのホームページには、Bさん自身がブログを書くためのスペースが設けてあるが、もとよりパソコン操作に慣れていないBさんは、ブログの更新をほとんどしていない。

現行の経営上の工夫はおおよそ以上だが<sup>8)</sup>、次に計画しているのは有機米、もしくは出来る限り化学肥料と農薬の使用を抑えた米の生産である。有機農法では、土地あたりの収穫量は減るが、その分、近年の環境配慮型農業への関心や安全志向のために、市場で付加価値のつくことが期待できる（農協は今のところこの種の米を評価することはない）。まずは50aほど作ってみて、反応を見たいのだという。

このように、数々の工夫をされているBさんだが、そこには問題もある。まずは、米価の下落である。コメ価格センターの指標価格によると、全銘柄平均の米価は、平成8（1996）年産までは2万円代を維持していたが、それ以降は（記録的な不作だった平成15〔2003〕年産を除き）徐々に値下がりし、平成19（2007）年産では1俵（=60kg）あたり1万5千円を切っている<sup>9)</sup>（農協の買い取り価格はこれをさらに2割弱下回る）。先に触れたいいくつかの試みは、当然ながらこの現状を乗り切らんとするものである。能登のコメは新潟県産のコメに比べて評価が落ちるが、Bさんがブランド米や有機農法の生産によって目指すのは、新潟県産と同水準（1俵あたり2万4千円ほど）の評価である。これに達することができれば、経営上十分な利益になるという。

もう一つの問題は、Bさんの経営に加わる人が道下地区にいないということである。先にも述べたように、Bさんは「道下の農地を守る」ことをスローガンにかかげている。国道を車で走っても「ここも荒れとる。あそこも荒れとる」と、寂しい思いをしない地域を作りたいのだという。では、そのためにはどれだけの人材が必要だろうか。現在の道下の農地は42haほどだが、これを全てカバーするためには、3~4人は必要だというのが、Bさんの主張である。一方、モロオカエーシーを設立することで機械化は実現したが（とはいえ、機械化には補助金の分を差し引いても1200万~1300万円程投資した）、現在までに同法人設立に携った7名のうち、4名の方々がすでに亡くなっている。現在のモロオカエーシーには、Bさんの他に2名が所属しているが、年齢や健康のため、実質はBさん一人が切り盛りしているも同然という。共に農業と農地を守る仲間を得ようと、これまでにも、1ha程度を耕作している比較的若い（60歳代前半の）請負農家に、「一緒に（農業で）お金儲けしてみよう」誘ったことがあるが、良い返事はもらえなかった<sup>10)</sup>。Bさんは、道下の農地を守るためには「60歳代の方がもう一人でも二人でも欲しい。でなければ、（私が十分に仕事ができなくなるとして）あと10年もたんなあ。不利な場所（=斜面にある田んぼや小さすぎる田んぼなど）はダメになるだろう」と言う。

米価の問題といい、協力者・後継者の不在といい、どちらも、B さん一人の力ではどうしようもないことである。少なくとも B さん自身も、目下のところこれらの課題に光は見えないと考えているようだ。というのも、B さんは「農業は不安定だから、若い人には薦められない」とも言われるからである。とうぜん誰かが望んで農業を始めるのであれば別だろうが、B さん自らが若者をリクルートするには、農業経営は不安が大きいということだ。

## 5. おわりに

第 1 節でおおまかに述べた現在の日本の状況からすると、農業の大規模経営に向けて孤軍奮闘の B さんには、心からのエールを送りたい。そのためにも、B さんの事業が広く人びとに知られ、そこに加わる人物の登場を願うばかりである。これはなにも農作業上のサポートばかりではない。たとえば、4 節では「モロオカエーシー」のホームページについてふれたが、なかでも更新記事の少ない B さんのブログは、こまめに生産者の日記や写真が更新される他のブログと比べると、いかにも寂しげに見えてしまうのが事実である。仮にインターネット上で「能登のコメ」に興味を持った買い手がいたとしても、これでは購買にはいたらないのではないかと感じた。少しでもパソコン操作に慣れた「助っ人」がいれば解消するであろうことだけに、これは少々惜しいことのように思われた。

ただしその一方では、昔ながらの農業に携ってきた人びとの、大規模経営に対する厳しい意見があることも事実である。本章では大幅に割愛せざるを得なかったが、これらの意見は、広い田んぼを耕作する場合に雑草処理や水管理の面で、「仕事が雑になる」こととまとめられる。たとえば、畔の雑草を農薬で根こそぎ枯らしてしまうことや、水をこまめに調節しないことで、畔自体が崩れることがあるのだという。こうした声は、土地やコメに対する人びとの思い入れが多少なりとも混ざっているだろうから、本来ならば筆者自身が実際に見て確かめなければならないことがらであるが、今回はそこまでの調査には踏み込めなかった。とはいえこれらの声に、人びとの土地やコメ作りに対する、園芸に比するほどの知識と注意が感じられたことも事実である。おそらく、A さんのように昔ながらの農業をする人々にこそ息づいている、特殊な〈感覚〉なのではないか。一銭のカネにもならず、むしろ私財をはたいてまでコメ作りを続けている人びとが少なくないことを考えると、この種の〈感覚〉は決して取るに足らないものではないはずだ。事業としての農業が優先される現代の農業において、この〈感覚〉は衰退してゆくのかもしれない。時代の流れとはいえ、これには寂しさも感じられた。

ところで、本章をほぼ書き終えた時点（2008 年 12 月 29 日）で、農林水産大臣の注目すべき発

言が各社新聞で大きく取り上げられた。すなわち、1970年代以来継続してきた生産調整（減反）の見直しをも含めた農業政策の転換方針が表明されたのである。減反の見直しはコメ価格の下落に直結するため、これは政府が推進してきた大規模農家の育成とは大きく食い違う。そこまでして政策を見直すのは、減反が農業の持続可能性に不利に働いているという見解のためという。筆者なりに言い換えると、これまでの大規模農家優遇措置は実際には零細農家の「やる気」を削ぐ方向により強く働いてきたという評価であり、日本の農業維持のためには零細農家の〈感覚〉も動員しなければならないということであろうか。いずれにせよ、道下の場合においても、大規模農家と小規模農家の双方が並存して農業を持続できる環境が望ましいことには間違いないだろう。

## 注

- 1) 道下の歴史にお詳しいZさん（79歳、男性）によると、「道下」の呼称が文献に現れるのは、1546（天文15）年であり、1701（元禄14）年の『郷村名義抄』にはすでに、「山の中央に道があり、家が道の下に立ち並ぶ」という記述がある。
- 2) 「販売農家」とは、経営耕地面積30a以上、または一年間の農作物販売金額が50万円以上の農家をいう。
- 3) 1990年以前は16歳以上、1995年以降は15歳以上である。ただし、「農家人口」の1970、1975及び1980年については15歳以上である。
- 4) 「自給的農家」は、経営耕地面積30a未満かつ一年の農作物販売金額が50万円未満の農家である。
- 5) 当時の田んぼは現在の半分ほどしか米が獲れなかったそうで、2反の田んぼで収穫できたのは、9俵ほどだった。
- 6) ただし、モロオカエーシーへの法人化は容易ではなかったという。これは、法人化に必要な収支の厳密に記録を面倒と感じるメンバーが少なくなかったためである。
- 7) 米以外の作物にも挑戦し続けているが、経営上うまくいったことはない（例えば、大豆は補助金がもらえたが土地に合わず、小松菜は輸送コストがかかりすぎた）。複数種類の農作物を作る方が経営上有利になり得るのだが、そこは人手がさらに1~2人必要になるため、しばらくはコメ一本の生産を続けるつもりという。
- 8) これに加えて、平成11（1999）年から平成16（2004）年にかけて水田に直接種を蒔く「直播栽培」をしていた。これは、一般には育苗と田植え作業の軽減のために行われるものだが、Bさんの場合は農地の面積が苗代用ハウスの容量を超えてしまったために採用された。ただしこの数年間、折悪しく、台風が直播きの苗の育成期とぶつかってしまい、やむなく断念した。
- 9) 農林水産省のホームページ上で閲覧できる「米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針（平成20年3月）」  
[http://www.maff.go.jp/j/soushoku/keikaku/beikoku\\_sisin/h200326/pdf/data1.pdf](http://www.maff.go.jp/j/soushoku/keikaku/beikoku_sisin/h200326/pdf/data1.pdf) を参照した。
- 10) 以来Bさんは、複数の農家が道下の耕地を経営するよりは、近年仕事不足している土建業の人々と一緒にできないかと考えるようになったという。ただし、「足腰の強い」法人なら日雇いで5~6人雇うことでも

きるが、モロオカエーはまだそこまで利益が出てはいない。